Osaka University Knowledge Archive

Title	中国哲学史研究ノート〔六〕
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1991, 10, p. 93-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61192
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国哲学史研究ノート（六）

加地伸行

雑誌には編輯方針というものがある。たとえば、日本中国学会の機関誌『日本中国学会報』は、論文を公募している。だから、同誌は論文を集録する編輯方針である。本誌の場合は、報告を中心とし、併せて論文も登載するという編輯方針である。

研究成果には、大別して論文と報告とがあると私は考えている。このノート〔一〕（本誌創刊号）においてすでに述べたとおりである。その両者はそれぞれ任務を異にしているので、その価値に上下はない。

ところが、研究者の中には、この両者の区別をしなかったり、あるいは分らなかったり、あるいは根本的には研究の目的が分らなかったりする人がいる。

もし論文と銘打つならば、少くとも「論」がなくてはならない。そして、その「論」を有効にするための証拠としての事実調査すなわち報告がなくてはならない。すぐれた報告の集積の上に立ってこそ、良い「論」ができるわけである。

私の言う報告とは、たとえば読解資料の提示（訳注など）・統計など計量的調査・書誌・年譜・資料紹介・文献提要・目録（書籍・論文などの）・訓詁（出典調査など）・翻訳・書評・事項の一般的説明・辞典項目・研究史など客観性のあるものである。

この報告は、実証的手法に徹したものでなくてはならない。また、こうした報告は訓練によって身につけるものであり、教育によって作成力の養成が可能なものである。いわゆるアカデミシャンとは、こうした報告を作成する技術を会得した者である。研究とは、まず報告を書けることである。

しかし、これはそう簡単なことではない。奥が深い。会心の報告はそうあるものではない。おたがい大した才能があるわけではないから、できぐあいはチョボチョボである。しかし、ともかく根気よく時間をかけ努力すれば、形にすることができる。だから、研究者の心がけとして、努力を武器にして常に報告を書くべきである。すぐれた報告が書けるということは、研究者として一人前であることを意味する。

報告は、実証的手法に基づき、時間や努力や根気などをかけると必ずできる客観的なものである。くりかえし言うが、報告と論文とは分野が異なるので、報告と論文との間に価値の上下はない。

さて、論文である。「論の文」である以上、そこに「論」がなくてはならない。これも報告と同様、そう簡単なことではない。というのは、実証的手法だけでは「論」を立てることができず、「論」にはアイデアが必要だからである。

それはこういうことである。「論」に必要な条件は、推し量って一つの新しい意見を提出することであり、その推量は実証ではなく、或る飛躍を伴なう。そのジャンプができるにはアイデアがひらめかなくてはならない。あえて言えば、実証的手法を忘れてジャンプすることである。

ただし、あくまでもジャンプであるから、しっかりと地についたジャンプ台が必要である。そのしっかりしたジャンプ台こそ、実証的報告である。

すぐれた実証的報告に基づいて、推量（ジャンプ）を行ない、或る見かたを提供するのが論文である。その見かたは、もちろん仮説である。論文とは、見かたの提供である。その見かたによって、中国文化を（全体的にせよ、部分的にせよ）どれくらい広く、あるいは深く見ることができるようになるかということによって、その論文の価値が定まる。

たとえば、ニュートンの仮説が出てくることによって、世界をそれ以前より大きく把えることができた。さらにアインシュタインの登場によってニュートン的世界よりももっと広く深く世界を把握することができるようになった。おそらく、将来、或る天才の登場によって提出される仮説によって、アインシュタイン的世界よりもさらに広く深く世界を理解することができるようになるであろう。

われわれの場合、或る論文の登場によって、中国文化を（全体的であれ、部分的であれ）見る見かたがより豊かになることができるならば、それは本物の「論」を持っていたことになる。

ところで、私が青年時代に耳にタコができるほど聞かされたのは「実証的論文を書け」ということばである。そのころは、そういうものと思っていたが、後にだんだんと懐疑的になっていった。そもそも「実証的論文」などというものは、存在しないのではないかと。

早い話が、世のいわゆる論文なるものを読んでいると、「客観的推論」どころか、至るところに「主観的推論」がある。ここで言う「推論」とは、論理学上の「推論」という意味ではなく、直覚的な蓋然的確率的推量の意味である。たとえば、「……とも言えるが、逆のことも言えるだろう」などという文に出くわす。これなどは実証性のない推量である。あるいは「……ではなかろうかと思われるほどである」などという無責任な推量もある。

私は思う、世に「実証的論文」などは存在せず、もしあると

すれば、「実証的報告に基づいて推量を行なう論考」であろう。それが論文の本質であると考える。

一歩一歩と段階を踏むことに徹し、ジャンプを許さない実証的手法は、報告作成という研究に最もふさわしい。しかし、ジャンプによって仮説を立て、それを検証しつつさらにジャンプを行なって論旨を展開する論文にとって、実証的手法はむしろ足をひっぱるものとなる。報告は客観性の実質化であるが、論文は主観性のそれである。

たとえば、私の仕事で言えばこうなる。儒教における孝とは、祖先祭祀、親への愛・敬、子孫を生むこと、この三者を併せている。そのことは、文献によって実証可能である。それは孝とは何かという概念化のための報告である。いや、論文中に引かれているときは、報告的部分と言うべきであろう。論文中の引用ではなくて独立した調査ならば、報告である。

さて私は、この報告的部分（あるいは報告）を踏んで、一つの解釈を与えた。すなわち、儒教のこの孝をば、死の恐怖を克服する生命論であると。それは仮説である。それは前記の報告的部分（あるいは報告）を踏んでの推定である。ジャンプである。ジャンプした「論」である。

こうしたジャンプは、実証的手法による報告から直接的に生れてくるものではない。そうした報告に基づきつつも、その報告の事実が何を意味するのかということを思惟した（哲学した）結果から生れたものである。その思惟はジャンプである。実証的報告をいくらいじくりまわしても、そこからその論理的帰結として新しいものは出てこない。実証的報告それ自身は完結した世界であるからである。

だから、実証的報告に対して、或る独自の解釈を与える、或る意味づけを行なう、そういうジャンプによって「論」が新しく生れる。それは主観性の凝縮されたものである。

もちろん、「生命論としての孝」という「論」は仮説である。当然、その仮説がどれほど有効であるのか、という検証がそのつぎの段階として、作業として必要である。その検証を通じて、中国文化を見る見かたをより深め広げることができれば、仮説として価値を有することになる。言うまでもないが、仮説は唯一ではない。人は自由に仮説を立てることができる。別の仮説がより有効であるかどうかということによって私の仮説の生命がきまる。新しい有効な仮説の登場によって、私の仮説が否定されることもあるだろうし、生きながらえることもあろう。たとえば、ニュートンの説も仮説であるし、アインシュタインの説も同じく仮説である。

「論」とはこのようなものである。あえて言えば、論文は、実証精神を越えたものである。報告が論理的・実証的・客観的であり、いわば理屈の世界であるのに対して、論文はそうした報告的部分を踏みつつも多分に推量的・修辞的・主観的であり、いわば屁理屈の世界である。

私はこれまで多くの論文を読んできたが、完全に実証的な論

文に出会ったことはない。もし完全に実証的な行論と言うならば、その行論において一点たりとも実証を欠いてはならぬ。AはBである。BはCである。たったこの二文でも、両者をつなぐために完全に実証的に述べることは、ほとんど不可能である。世の大半のいわゆる「論文」は、実はつぎつぎと飛躍しながら論述している。一点の飛躍なき論文があればお目にかかりたい。高名な論文であるが、穴だらけでありその穴の上をすいすいと推定している例をいくらでも指摘することができる。ひどい場合は、或る人の説に対して、ただ「私はそうとは思わない」とだけ書いて否定するというジャンプ、いや逆立ちをしている例すらある。

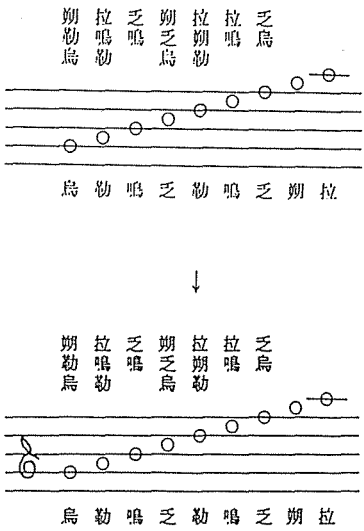
学問の近代化が始まってほぼ百年、この辺でおたがい本音を吐くことが大切と思う。われわれは、実証的論文、実証的論文と気安く言うことを改めるべきであろう。屁理屈の論文を書くことと、理屈の報告を書くこととの区別をまず意識することであろう。そのつぎは、特性を伸ばすべきである。報告の得意な者は報告に徹してよいではないか。性格として論理的・実証的・客観的な者にとってぴったりだからである。また、論文の得意な者は論文に徹してよいではないか。性格として、推量的・修辞的・主観的な者にとってぴったりだからである。

その意味で、論文公募のみを行なっている『日本中国学会報』は、非常に限定的であり、投稿しにくいと言えよう。その編輯方針として、将来、あるいはすぐれた報告に道を開くことが必要となるかもしれない。

ちなみに、私は報告・論文を併せて「論考」と称している。

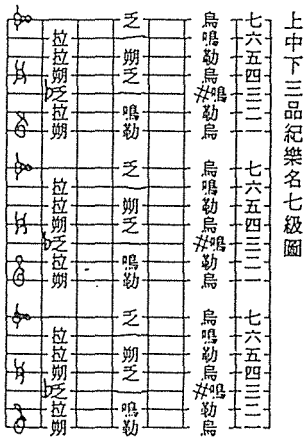
中国研究集刊日号正誤表

	誤		正
13頁下段11行目	越在	↓	超在
17頁上段3行目	浮巫祝	↓	巫祝
19頁上段12行目	天下太平—	↓	天下太平—
24頁図5			

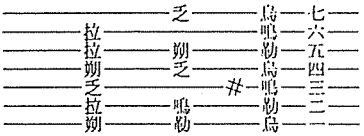


26頁図3

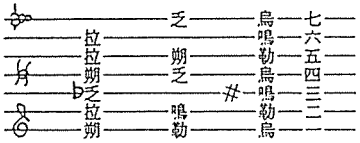
←



27頁図2



↓



42頁上段15行目　們都解放了　↓　你們都解放了
45頁上段倒数1行目　かかいる　↓　かかっている
50頁上段7行目　洗う　↓　を洗う
54頁上段6行目　研究進めたい　↓　研究を進めたい
60頁上段4行目　デザー　↓　ザデー
64頁上段14行目　二進方　↓　二進法
65頁下段8行目　のである　↓　ためである
67頁下段10行目　援用　↓　応用
68頁上段8行目　対応すると　↓　対応する
70頁下段1行目　「気…」　↓　『気…』
72頁図2　リンジ　↓　リジン
73頁図4（a）　上下転倒